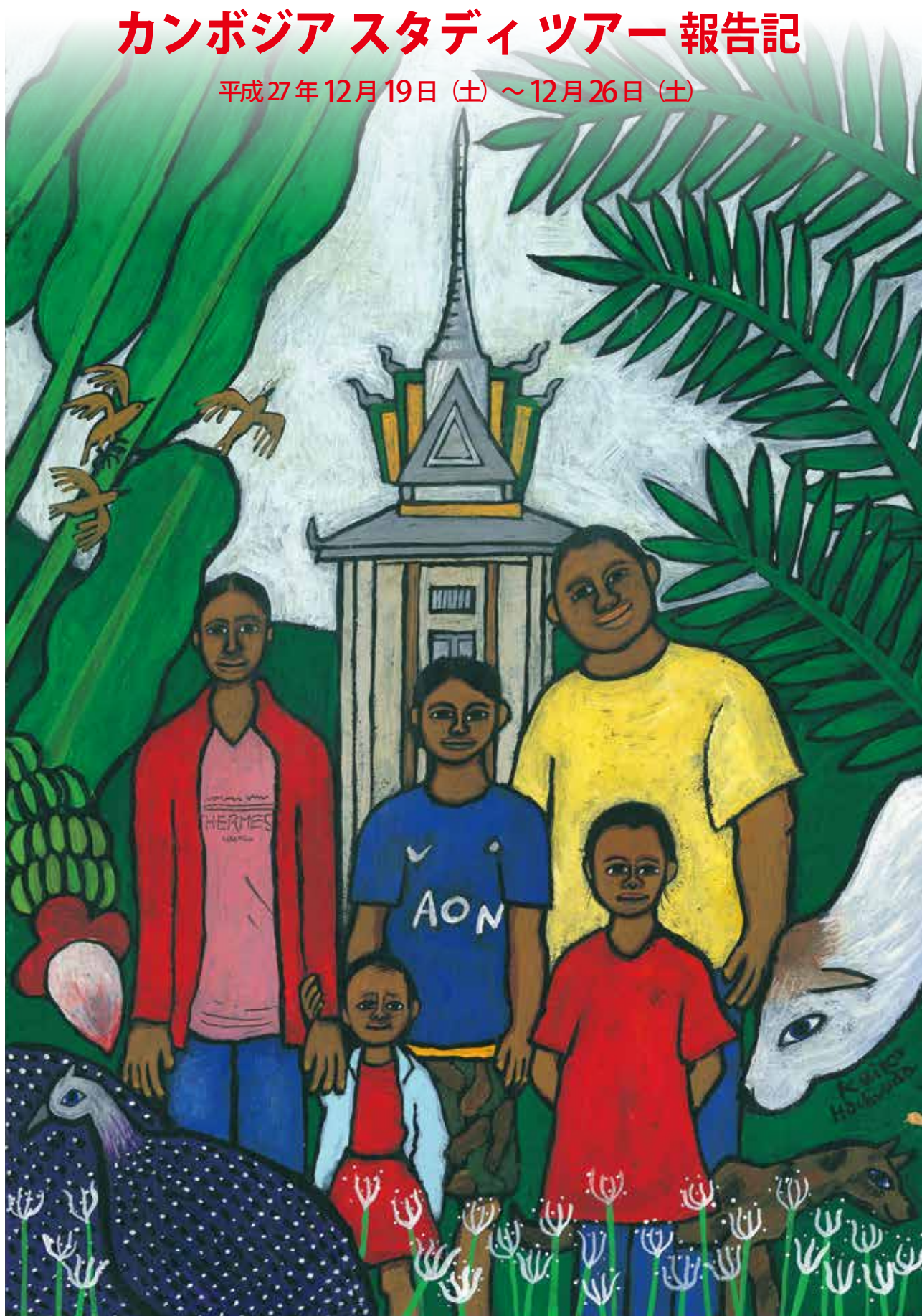


カンボジア スタディ ツアー 報告記

平成27年12月19日(土) ~ 12月26日(土)



目次

- 1** はじめに
- 2** コンセプト
- 3** 日程表
- 4** カンボジア基本情報
- 5** ツアーを終えて 参加者感想
- 18** 事前研修
- 19** 事後研修
- 20** 活動&交流風景



はじめに

(公財)山梨県国際交流協会設立25周年を記念して、平成27年12月19日から26日まで、カンボジアの歴史や文化を学び、地域の人々との交流をとおして、今求められる国際協力、国際貢献について考える「カンボジアスタディツアー」を実施しました。メンバーは中学1年生からシニアまでの世代を超えた参加者22名とスタッフ合わせて25名。様々な角度からカンボジアを学びました。

私たちはカンボジアの首都プノンペンに到着し、まず、内戦の歴史を学ぶためトゥールスレン博物館、キリングフィールドを訪れました。ポルポト政権下の想像を絶する残虐行為を目の当たりにし、その悲惨さに目を覆いたくなる思いでした。しかも、これらの出来事が遠い昔のことではなく、まだ30数年前の出来事であったことに大きな衝撃を受けました。あの地に足を運んだからこそ感じられたことで、皆さんも同じ思いではなかったかと思えます。

更に、私たちは内戦の負の遺産であるバットアンバンの地雷原を訪れ、現地の人々が今も地雷に苦しめられている現実を肌で感じました。

こうした状況下、(株)建の雨宮社長の地雷除去機の開発により、地雷撤去が飛躍的に進み、地雷原が豊かな土地に蘇り、安心して農作物を育てることができるようになったことは、地元の方々にとって計り知れない喜びであると感じました。カンボジアの人々は彼のことを「私たちの英雄、地雷除去の父」と呼ぶそうです。

私たちが参加した「農業収穫祭」に出品された見事な野菜や果物を見て、雨宮社長の偉業の大きさを改めて実感し、この英雄が山梨県人であることを誇らしく思うとともに、心から敬意を表する思いでした。

私たちは今回の訪問でバットアンバンのプレイビール小学校を始め、幾つかの小学校を訪れ、多くの子どもたちと交流しました。日本の伝統的な遊びである折り紙やけん玉などで遊んだり、岩崎さんのギターで「アラピア」を歌い、遊びをとおして心が通い合えた思いでした。

他方、教育環境は決して十分とはいえません。ハード面のみならずソフト面の充実、特に教育の質の向上の必要性を強く感じました。『国づくりの原点は教育』です。そのために私たちにできる支援はまだあると感じました。

振り返ってみると、首都プノンペンは急速な発展を遂げる一方、少し離れると田園風景の中貧しい農村の暮らしが広がり、日本の古き時代を彷彿させるような光景でした。そこに暮らす人々は悲しい過去を持ち、心に深い傷を負っているにもかかわらず、誰もが純粹で生き生きとした屈託のない笑顔で私たちに接してくれました。特に子どもたちの澄んだ瞳はキラキラと輝いていました。

今回のツアーで心に残ったのはガイドのポーキーの言葉でした。「カンボジアの人は誰にも哀しい過去があったが、それを振り返って人を恨むことはしない。それはどんな人も生まれ変われば善人になると信じるから。平和になった今を心から喜び、全ての人を家族と思っている。」それを聞いて、私たちの車がトラブルを起こしたとき、立ち寄った民家の人々が温かくもてなしてくれたこと、また、出会った人々が明るい笑顔で接してくれたことを思い出し、私たちはカンボジアの人たちに比べ経済的には豊かですが、心の豊かさを考えた時どうなのだろうと考えてしまいました。

今回のツアーは通常の観光では体験することのできないメニューが殆どでした。これも全行程において細かなアレンジをいただいた「豊かな大地」カンボジア事務所のモン・ソンバー氏や「CMA C地雷除去センター」の皆さんなどの支援によるものと心から感謝します。

最後に、今後、日本とカンボジアの相互交流が更に深まり、カンボジアの人々が安心して暮らせる社会になることを心から祈念します。また、今回のツアーが実り多いものとなったのは、参加者一人ひとりの旺盛な好奇心、何かを学び取ろうとする熱い思いとチームワークの良さによるものと心から感謝申し上げます。

『今、私にできることは何だろう?』と自らに問いかけています。



カンボジア・スタディ・ツアー団長
(公財)山梨県国際交流協会 事務局長
市川 由美



立ち寄った民家でココナッツジュースのおもてなし



コンセプト

● 趣 旨

平成27年当協会が設立25周年を迎える節目の年に、協会がこれまで取り組んだ“カンボジアにおける地雷除去及び復興地域の人々との交流”を踏まえ、「株式会社日建」、NPO法人「豊かな大地」と連携し国際協力・国際貢献に対する関心を一層深めることを目的として、カンボジアへの「スタディ・ツアー」を実施する。

● **実施期間** 平成27年12月19日（土）～12月26日（土）【6泊8日】

● **参加者数** 25名（スタッフ3名を含む）

● 実施内容

（1）○事前研修

★ 第一回事前研修／平成27年11月14日（土）

（株）日建見学及び地雷除去活動等説明 『豊かな大地』理事 寺平 誠 氏
「カンボジアでの音楽交流」岩崎けんいち 氏
グループワーク（4班に分かれテーマを決定）

★ 第二回事前研修／平成27年12月5日（土）

「カンボジア事情」シニア海外ボランティア 折居 和夫 氏
グループワーク（訪問先での具体的な活動内容など）

○事後研修

★ 帰国報告会／平成28年1月30日（土）

感想及びグループワーク報告

（2） 訪 問 先 ・JICA カンボジア事務所

- ・カンボジア地雷対策センター（CMAC） 本社及びバットバン事務所
- ・HOC（Hope of Children）児童養護施設
- ・バットバン州プレイピール村及び小学校等

（3） 交 流 バットバン州スラッパン、プレイピール小学校

バットバン州プレイピール村での農業収穫祭
HOC 児童養護施設
※チョークアート（絵画）及び音楽交流ほか折り紙指導等

（4） 視 察 地雷撤去現場、キリングフィールド、トゥールスレン博物館（内戦の歴史）

アンコール遺跡群

● 連携機関

カンボジア地雷対策センター（CMAC：Cambodia Mine Action Centre）

カンボジアで暮らす人々が、地雷の被害に遭うことなく、安全な生活環境のもとで農業復興や開発活動に従事できることを目的として、国が設置した地雷除去を専門に行う機関。

その起源は、UNTAC（国連カンボジア暫定行政機構）の地雷除去作業と、そのための訓練を指導した地雷除去訓練部（MCTU）であり、1993年に現在の「CMAC」となった。

特定非営利活動法人「豊かな大地」（GEJ：Good Earth Japan）

NPO法人「豊かな大地」は、カンボジアにおける地雷除去後の土地で、人々が自立した生活を営むことができることを目指して、農地整備をはじめ、農業技術の普及及び生活環境改善のための支援活動を行っている。

日建機（株）OBが、国際貢献活動を行うために設立した非営利団体。

日程表

日付	都市	時間	交通機関	スケジュール	食事
12月19日 (土)	甲府発	04:15	専用車	専用車で成田空港(第1ターミナル4F/北ウィング)へ	朝:なし
	成田発	09:30	VN301	ベトナム航空にてホーチミンへ	昼:機内食
	ホーチミン着	13:20		着後、国際線乗り継ぎ(トランジット)	夕:ホテル
	ホーチミン発	16:15	VN920	ベトナム航空にてプノンペンへ	
	プノンペン着	17:00	専用車	空港にてお出迎え、ホテルまでご送迎 ホテル:TOWN VIEW HOTEL 泊	
12月20日 (日)	プノンペン	朝	専用車	ブリーフィング(「豊かな大地」より)	朝:ホテル
		終日		プノンペン視察①歴史、生活文化(王宮、セントラル・マーケット) ②内戦の歴史(キリングフィールド、トゥールスレン博物館)	昼:レストラン 夕:レストラン
		夕刻		市内レストランにてご夕食	
				ホテル:TOWN VIEW HOTEL 泊	
12月21日 (月)	プノンペン	09:00 11:00	専用車	JICAカンボジア事務所訪問★ CMAC本社(カンボジア地雷対策センター)訪問★	朝:ホテル 昼:レストラン
	プノンペン発	午後		昼食後、陸路にてバタンバンへ移動	夕:レストラン
	バタンバン着	夕刻		バタンバン到着(市内見学) ホテル:KHEMARA HOTEL 泊	
12月22日 (火)	バタンバン近郊	午前	VAN 4	陸路にてクロッコローへ CMAC-AMEMIYA小学校オープニングセレモニー★ CMAC-CDC(農業耕作地付団地)内	朝:ホテル 昼:レストラン 夕:レストラン
		午後		HOC児童養護施設訪問(子ども達との交流他)★ Café HOCにてご夕食 ホテル:KHEMARA HOTEL 泊	
12月23日 (水)	バタンバン近郊	午前	VAN 4	陸路にてバナン地区へ 農業収穫祭参加(地域住民&子ども達と交流)★	朝:ホテル 昼:お弁当
		午後		プレイピール小学校訪問★ カンボジア人担当者4名を囲んでの夕食 ホテル:KHEMARA HOTEL 泊	夕:レストラン
12月24日 (木)	バタンバン近郊	午前	VAN 4	地雷撤去現場視察★ バタンバン市内に戻り、昼食	朝:ホテル 昼:レストラン
	シェムリアップ	午後	専用車	陸路、シェムリアップへ移動(約4時間) ホテル:ROYAL CROWN HOTEL 泊	夕:レストラン
12月25日 (金)	シェムリアップ	午前	専用車	アンコール遺跡見学(アンコールワット他)	朝:ホテル
		午後		自由行動	昼:なし
		夜	VN 834	夕食後、空港までご送迎	夕:レストラン
	シェムリアップ発	20:30		ベトナム航空にてハノイへ	
	ハノイ着	22:10		着後、国際線乗り継ぎ(トランジット) 機中泊	
12月26日 (土)	ハノイ発	0:20	VN310	ベトナム航空にてご帰国の途へ	朝:機内食
	成田着	07:00		成田空港到着(第1ターミナルへ)	
	成田発	10:00	専用車	専用車で甲府へ	
	甲府着	13:30		甲府到着後、解散	

カンボジア 基本情報



- **国名** カンボジア王国
- **面積**
約18.1万平方キロメートル
(日本の約2分の1弱)
- **人口**
14.7百万人(2013年政府統計)
- **首都** プノンペン
- **民族**
カンボジア人(クメール人)が90%
- **言語** カンボジア語
- **宗教**
仏教(一部少数民族はイスラム教)
【外務省データ 2017年1月現在】



- **地理**
この国の中心には国際河川の大河メコン川が流れ、水運を担っている。主食は米で稲作農業が盛んである。この国の中央付近にはトンレサップと呼ばれる大きな湖があり、その北方にはクメール王朝の遺跡として世界的に有名なアンコール・ワットやアンコール・トムといったアンコール遺跡(1992年、世界遺産登録)が存在する。

国土の大部分は海拔100m以下であるが、プノンペン西方にカルダモン山脈が連なり、最高峰プノン・アオラル山(1813m)がある。

- **気候**
モンスーン気候帯に属し、5～10月が雨季、11～4月が乾季である。雨季にはタイ湾からの風で気温は22℃まで下がり、乾季には北東風で40℃まで上がる。雨季のメコン川の増水でトンレサップ湖に逆流し、湖面積がほぼ10倍に拡大する。

参加者感想

「カンボジアスタディツアーに参加して」

雨宮 里子 (主婦)



初めてスタディツアーに参加し、戸惑いながらも改めてカンボジアを見つめ直すよいきっかけとなりました。

2002年に初めて訪れたアンコールワットは圧巻、ただただ感激したのを覚えています。まだアンコールワットがそれ程整備されておらず、無料で見られる頃でした。

今まで仕事で行くことが多かった私には、今回のように子どもたちとあれ程長く触れ合う機会はありませんでした。日本から用意していった折り紙やチョーク、黒板、風船、お菓子や飴、そして歌、それぞれの班で話し合い考え、子どもたちとどう向き合い短い時間を楽しめるか試行錯誤。持参した物を使い、一緒に笑い喜び合うことができましたのは、素晴らしい企画を考えた国際交流協会のスタッフのお陰だと心から感謝しています。

前回「豊かな大地」で行ったのが4年前、その頃より町全体が綺麗になったと感じました。もちろん首都プノンペンと地方ではまだまだ格差がありますが、生活が豊かになって来ている

と素直に嬉しく思いました。

小学校のトイレをお借りした折に見た光景は衝撃的。トイレの脇にあった壺、私たちはてっきり手を洗う水かと思ったが覗くと水が少ないのでその時は手持ちのおしぼりを使用しました。再度訪問の折、子どもたちがこの水を飲んでいてことにとても驚き、これが現実だと思い知らされました。

トイレで流す水は子どもたちが遠い場所からニコニコしながら運んでいる、どの子どもちょっとシャイで愛らしい顔をしていました。私達の子供の頃より生活環境は悪いはずなのに、この明るさと逞しさ、子どもが多いカンボジア、10年後のこの国はどうなっているのか、日本人の方が心が貧しく寂しい人たちが多くなるかもしれないと心細くなりました。

カンボジアの500リエル札に日本が作った「つばさ橋」と日本の国旗が印刷されていると教えて頂き確認、外国紙幣に載るほどの援助を日本がしている、今まで目に見える感謝の表し方を見たことがなかったのもとても嬉しく誇らしく感じました。

今回のツアーでは中学生から高校生・大学生そして私たちのようなシニア世代と幅広い年代層の集団でしたが、日本の若者も捨てたものじゃない、こんなにしっかりした若者がいる、バイタリティのある40、50代の方も参加していると感じました。皆さんと何日か行動を共にして、力強く感じるとともにカンボジアに力を注ぐ日本人が大勢いる、この人たちとともに微力でも何かできることをしていきたい、目を向け続けたいと強く思った旅でした。

「豊かであること」

植田 裕子 (フリーランス)



戦争による地雷で足を無くしそれでも働かなければならず貧困に苦しむ国。これがツアー申し込み前の私のカンボジアに対する印象でした。それが帰国後、誰かにカンボジアの事を話す時は必ずこう言います。豊かな国だったと。ここでは細かなことは書ききれないのでカンボジアへの捉え方が大きく変わった出来事を3つ記します。

1つ目はツアー2日目のキリングフィールドにて。いわば初日ははじめの訪問先としてトゥールスレン博物館の後、キリングフィールドを訪れました。そこで私は初めてポルポトがカンボジアで行ったことを知りました。話を聞いているうちに胸が苦しくなり、まさなら大地に積まれた頭蓋骨を見て悔しくなり、今の今まで知らずに無縁に生きてきたのに、こんなことをした政権に対して許せない思いが生まれてきたのです。そこでガイドのポーキーにカン

ボジアの人はポルポトを許しているのか聞きました。返ってきた答えはカンボジアの考え方は死んだ人とは話せないから恨みはそこで終わり、輪廻転生してその人が来世で善い人になることを願う、でした。この言葉でカンボジアの人の器の大きさを少し感じ始めたのです。

2つ目はプノンペンからバタンバンに向かう途中で起こったバスのオーバーヒート。予期せぬ持て余す時間を私たちは運転手さんが水を求めて駆け込んだ民家で過ごすことになりました。慌ただしい運転手とともに突然現れた外国人30人弱。ぞろぞろお邪魔する集団に家族は嫌な顔せず、庭のヤシの実でもてなしてくれました。日本では考えられない対応にポーキーは「カンボジアではよくあることだ。カンボジア人は都会へ米や果物を売りに行っても途中で知り合いに会えばあげてしまっって売るのがなくなることもあります。誰かが喜んでくれればそれでいい。」と笑顔で教えてくれました。

3つ目は地雷原への移動中、ポーキーから許すことについて聞いた時です。先のポルポトへの思いについて私はポーキーに少し意地悪な質問をしました。亡くなった人への気持ちはそうやって変わっていくけど、生きている人で許せない人にはどうするの？と。ポーキーはあっけらかんとした声で、引越すと言いました。近くに嫌な人がいれば家や畑を安い値段で売って遠くに離れると。私は思わず笑ってしまいました。相手を変えようとか自分の正しさを見せつけるのではなく、自ら変わる。私が人生で手に入れたと思っている豊かな心をカンボジアの人たちは持っている気がして、カンボジアへの印象はまるで別のものになったのです。

「カンボジアに行って」

海老澤 大樹 (甲府西高等学校 2年)

私がカンボジアで感じたことは2つに分けることができます。異文化や自然の特色といった現実と過去の内戦や現代の社会問題といった現実です。

まず、異文化や自然について説明したいと思います。ヤシの木などを始め、多くの見たことのない植物がありました。

「国民性」が印象に残っています。日本と比べると少し雑な部分が目立ちますが、話しかけやすく柔らかい雰囲気でした。学校を訪問した際には、子どもたちの元気に衝撃を受けたとともに、何か温かいものを貰った気がします。人ともっと積極的に関わっていきべきだと学ばされました。

次に内戦や現代の社会問題といった現実について説明したいと思います。2日目にトゥールスレン博物館に行きました。そこはポルポト政権の負の遺産といわれている場所で、学校を利用して作られた収容所です。そこには拷問器具やその風景を描いた絵などがありました。中でも一番印象に残っているのは、収容者の写真です。電気を利用した拷問後を映してあり、横たわっている様子はとても生々しく、酷いものでした。見ていただけでも吐き気を催すものが多々あり、未だにはっきりと覚えています。観光地では、地雷により手足がなくなった人や、学校にいけない子どもが物乞いをしていました。「私に何ができるのか。」何度も何度も考えさせられました。ですが、今の私



では何も出来ないと分かり、無力感と悔しさに苛まれました。

カンボジアを通して私は「誰の為に生きるのか」ということを考えました。私の目指している職業は非常に発展途上国で必要とされています。そのため、何らかの形で恩返しをしたいと思います。どちらか一方ではなく、少しではありますが他人の幸せに貢献できればと思います。

海外で様々なものに触れたことにより考え方に変化が表れたり、精神的に余裕が持てる様になりました。間違いなく将来の私にプラスになったことでしょう。いつかカンボジアに恩返しをしたいと思います。

「スタディツアーに参加して」

小野川 恵美 (公務員)

このスタディツアーは事前研修から始まりました。2回の事前研修でこのツアーには、高校生をはじめ様々な職業の方が参加していることがわかり、とてもワクワクしながらカンボジアと山梨県との繋がりを勉強しました。

私にとっては初めてのカンボジアでした。このツアーに参加する前までのカンボジアのイメージは名前だけ知っている「アンコールワット」と『ポルポト』ぐらいでした。しかし事前勉強にてカンボジアは昔の偉大なアンコール王朝の世界遺産が多数あり、タイやベトナム等の影響により内戦やポルポト派政権による悲惨な状況で国が崩壊しそうになりましたが、再び立ち上がり現在は若いパワーで成長している国でした。しかし成長に伴い貧富の差が顕著に都心や地方に表れている国でもありました。

内容の濃いツアーでありましたが、一番印象に残っていることは子どもたちの笑顔でした。小学校や児童養護施設等では経済的に決して裕福では無い環境の中でも生きていくたくましさや明るさに心を打たれました。

あつという間のスタディツアーでありましたが、とても充実しておりメンバーとも深い交流をすることができました。そして普通の旅では味わえないスタディツアーは私にとって初め



てであり、カンボジアの歴史・文化等を学ぶことができました。団長をはじめ岩崎さんの歌に皆元気付けられ、メンバーの笑顔に日本の団結力を感じました。まだまだカンボジアには国際協力の必要性はありましたが、日本もカンボジアに日本人が忘れていた笑顔や感動を、改めて教えてもらいました。これからも日本とカンボジア共に協力し合えたら、更に成長するはず です。

最後にこのスタディツアーに参加できたことに感謝します、オーケン。

「たくさんの出会いに感謝」

岡 美紗子（都留文科大学3年）



「カンボジアに行ってみよう。」と思い立ち、このスタディツアーに参加しました。開催が第2回目となるこのツアーの参加者の人と世代や職業を超えて、関わりを持つことができました。話してみるとカンボジアに対するイメージや参加の目的は人それぞれだと分かり、そこですでにいい経験をしたなと感じています。

せっかく行くのだから何も知らないのはもったいないと思い、出発前の約1か月、カンボジアはどんな国で、どんな文化を持ち、どんな歴史を歩んできたかネットや文献で調べてみました。戦争、地雷、ポル・ポト政権の歴史を目の当たりにし、出発前に気持ちがかなり落ち込んでしまった一方、経済、教育、観光などの面で、確実に再生への道を歩んでいることを知りました。そして2015年12月19日、自分なりに集めた知識と、ツアーに対する期待を持っていざカンボジアに旅立ちました。

衝撃の連続だったのは、2日目に訪れたトゥールスレン博物館とキリングフィールド。ある程度は気持ちの面で覚悟をして

いたつもりだったのですが、刑務所として使われた建物、人骨や衣服が残ったままの虐殺現場、死因別のシールが貼られた頭蓋骨など、事実がむき出しになった多くの展示を目にして、いろいろな考えが一気に頭の中を巡り、どう言葉にしていけなからなくなりました。

本物に触れるという点では、6日目の地雷撤去現場を視察し、地雷の威力を知ることができたのも、なかなかできない経験でした。現地ではこのように衝撃を受ける部分もたくさんありましたが、その一方で「微笑みの国」と言われるカンボジアから多くのパワーをもらいました。CMAC-AMEMIYA 小学校の開校式、農業収穫祭、スラップン小学校、プレイピール小学校、HOC、ルセイロ小学校など…訪問先では人々が笑顔で受け入れてくれて、本当に嬉しい気持ちになりました。折り紙1枚で喜んでくれる子どもたちの純粋さ、キラキラした笑顔が印象に残っています。

また朝日の昇るアンコールワットは息をのむような美しさで壮大でした。人生のうち一度は行きたいと思っていたのですが、ただただ感動でした。さらにカンボジアならではの澄んだ青空、爽やかな大地、大自然の香りは自分の気持ちを豊かにしてくれるようでした。

今回のツアーで私がカンボジアのためにできたことはなかったかもしれませんが、しかし現地で頑張っている古澤さん、岩田さんや、活躍する日本の技術を、実際に見て聞いて知識を得たこと。経済的支援だけでなく、岩崎さんの音楽や羽中田さんのチョコレートなど、多方面からの支援の形を知ったことで、今後の生活にプラスになったなと感じています。

最後になりましたが、このスタディツアーの機会をくださった国際交流協会の方、現地の担当者の方、参加者の皆さんに加えて、最終日までハイテンションおしゃべりな現地ガイドのポーキーに感謝したいと思います。オーグン！

「カンボジア発見ツアー」

加藤 邦一（会社員）



「大家族で出かけたカンボジア発見ツアー」と謳っても過言ではない今回のスタディツアーでした。ツアーを企画して頂いた国際交流協会の皆様、現地でいろいろなイベントを催してくれたGEJやCMACの方々、旅先をいつも明るく照らしてくれた島村さん、ポーキーさんの絶妙なガイドコンビ。お陰様で本当に素晴らしい体験ができました。

ツアーに参加した、中・高・大学生の皆さんは貴重な体験を通じて自分自身を見直したり、周りの事を考え直す良い機会になったことでしょう。又 私のような年代にとっ

ては残されたライフオリティを豊かにするためのよい刺激になったと思います。私、個人としては前回同様、このツアーを通してプレイピール小学校の子どもたちに滑り台等の遊具をドネーションできたことが何よりの成果でした。

首都のプノンペンには、私がボランティアを始めた15年前と比べると、全てが驚く程変わりました。しかし少し地方へ行くと、依然として電気をはじめとする生活インフラも十分ではありません。子どもたちの教育内容も、美術や音楽、体育といった創造力や表現力、感性を養うための重要な科目が充実していない事も変わりありませんでした。

今回、羽中田さんや岩崎さんのパフォーマンスを子どもたちがキラキラとした瞳と、輝くような笑顔で楽しんでいる様子を見ると、音楽や美術といった科目がとて大切であることを改めて認識しました。

子どもたちの笑顔や真剣な眼差しが、「喜んでくれる何かをしたい」という、この国に初めて係わった時の気持ちをさらに強くしました。同時に、新たな出発点を作ってくれた素晴らしいツアーだったと思います。

「カンボジアで カンボジアから カンボジアへ」

久保 弘恵 (保育士)

飛行機の窓から見える緑の大地を眺めながら、この国との不思議な出会いを感じていました。私の父は今から21年前の1995年、66歳で農業支援員としてカンボジアに渡っており、私は2001年から2002年まで幼児教育のボランティアとしてこの国に住んでいました。2012年に再びカンボジアを訪れているので、三度目となるこの景色。懐かしい思いが甦ると同時に今回はどんな新しい出会いがあるのか…と期待が膨らみました。

思いがけない出会い、それは13年ぶりにセントラルマーケットの店員さんに会えた事、さらに昔住んでいたアパートが今もあることでした。高層ビルが立ち並ぶプノンペンを見ながら月日の流れを感じていたのですが、村に向かって走り始めたバスから目に入って来る景色は、今も昔も変わらぬものでした。そして人々の明るさや笑顔も、子どもたちの瞳の輝きも変わることなくここにありました。

私たちには想像もつかないような苦難の歴史を背負いながらも、悲壮感や絶望感が感じられず、前を向いて生きている人達。地雷除去現場、学校、児童養護施設と多くの人たちに触れ時間を過ごすうちに、いつしか肌以上に頭の中がこんがりと地球色に日焼けしていくのを感じました。

私は『カンボジアで』感じた事考えた事をできるだけ多くの人に伝えたいと思っています。しかし誰でもそうであるように、現実を見なければわからないものがたくさんあります。ですから多くの人にカンボジアを訪れその目や耳や肌で感じてほしいと思います。

そしてカンボジアの人と一緒に『カンボジアから』発



信できることができ、その輪が広がっていくことができればそれがベストだと思います。

さらにその輪の思いや考えを『カンボジアの方達へ』と返していくことができると思います。真の支援とは何か…みんなで考え、ここを出発点にしていきたいと思っています。

『カンボジアで カンボジアから カンボジアへ』遠い日本から抱く思いを少しでも形にしていきたいと思っています。

「カンボジア・スタディツアー実施レポート」

小林 江美子 (公務員)

(1) 事前研修

株式会社日建を見学し、地雷除去重機の改良部分や用途などについて説明を受けました。

グループ学習では、私の所属するAグループは、『笑顔を通じてカンボジアを知ろう』をテーマに、カンボジアの歴史・文化・現状などの学ぶことにしました。

(2) 実地研修

初日は、NPO豊かな大地から、地域のコミュニティが持つ文化や習慣に配慮した活動について説明を受けました。続く市内視察では、トゥールスレン博物館はじめ4箇所を見学し、カンボジアの歴史や文化について学びました。

翌日のJICA訪問では、カンボジアの現状と日本との関係、JICAの活動や山梨県出身のシニアボランティア古澤様から、活動の様子をお聞きし、その後CMAC事務所において、活動の説明を受けた後、地雷や不発弾の実物を見学しました。

翌日は、日建の雨宮社長の尽力により建設された小学校の引渡し式に臨席し、式典後は子どもたちと「アラピヤ」を合唱し、楽しく過ごしました。午後は、HOCに入所する子どもたちと、日本から持参したおもちゃで交流しました。子どもたちからは歌と踊りの披露があり、元気を貰いました。

翌日の農業収穫祭では、米の収穫・脱穀作業や、農産物品評会に参加し、初めてお米を手で刈ったり、足で脱穀しました。午後は小学校で子どもたちと交流しました。折り紙に夢中になってしまいましたが、子どもたちは喜んでくれました。

翌日は、地雷除去現場を視察しました。地雷原マークや土中



の地雷を初めて目にし、まだ完全に撤去されていない現実を改めて実感しました。

最終日は、アンコールワットやベンメリア遺跡も見学し、満喫した6日間でした。

(3) まとめ

今回のツアーでは、沢山の笑顔に囲まれました。訪問先の子どもたちの笑顔も印象的ですが、様々なハプニングで偶然交流した人々の笑顔や温かいもてなしは一生忘れられません。

また、ボランティアについても、相手の生活や文化を理解し尊重した上で支援をすることが大切だと知り、学びと気づきの多い研修となりました。

「子どもたちから学ぶカンボジア」

近藤 綺音 (都留文科大学4年)



カンボジアと言えば地雷、貧しい。そんなイメージだけどんな国なのだろう、テレビでよく見るカンボジアという国を知りたいという気持ちで今回のツアーへ参加しました。

それぞれ熱い想いを持つ参加者のみなさんと1週間カンボジアで過ごして、一番印象に残ったことは子どもたちの笑顔です。ツアー初日から最終日まで様々な場所でたくさん子どもたちに出会いました。笑いかけると笑い返してくれる子ども、歌で笑顔になる子ども、「ニョニョーム！」と嬉しそうに笑う子ども。そんな姿を見て、子どもたちの笑顔は世界共通のパワーを持っていて、大人たちや国の原動力、そして宝物なのだと感じました。

しかし、笑顔でいられる子どもたちばかりではありませんでした。ボロボロの服を着て、裸足で「1\$…1\$…」とせ

がんでくる子どもや、道の端でぐったりと座る子どもに出会う度、心を痛め、「この子たちが笑顔でいられるためには…」と考えさせられました。

小学校訪問では、授業の様子や子どもたちとの交流をさせてもらい、日本との教育環境の違いに驚きました。ノートや鉛筆はもちろんありません。あるのは黒板と教師と机だけでした。カンボジアは決して恵まれた環境とは言えません。今、カンボジアは安心して幸せに暮らせるように努力しています。これから先、カンボジアが発展していくためには子ども達が教育を受けることが大切です。十分であると言えない学校現場の現状とカンボジアの文化を目の当たりにして、改めて教育の重要性と責任を感じました。

今、カンボジアを大きく支援しているのは日本です。現地へ移住して人生をかけてカンボジアのために働く日本人もいます。また、今回のツアー参加者の方々でも特技を生かしてカンボジアを元気づけたり、子どもたちが喜ぶような出し物を考えたり、カンボジアについて知って少しでも力になりたいと考えている人たちがばかりで、国境関係なしに人間が人間を支える日本人の素晴らしさと日本人であることに誇りを感じました。

私は、4月から日本の小学校教員として社会へ出ます。今回のツアーで学び感じたこと、現地で実際に見てきたことを伝え、生かしていけるよう努力していきたいです。そして、いつかカンボジアの人々が苦勞しなくてもいいように、幸せに暮らしていけるように祈り、支援していきたいです。

「ニョニョーム」

佐野 千帆 (都留文科大学4年)



カンボジアで過ごした一週間は、楽しいだけでなく、学びのある、忘れることのできない、とても貴重な時間となりました。カンボジアの内戦の歴史についての学び、村人や子どもたちとの交流、地雷撤去現場の見学、アンコールワットとベンメリアの遺跡巡り、毎日が濃くて、充実していて、夢のような時間はあっという間に終わってしまいました。

このツアーで一番楽しみにしていたことは、子どもたちとの交流でした。小学校や児童養護施設での子どもたちとの交流はとても楽しく、目をキラキラと輝かせながらはしゃ

ぐ子どもたちの姿は忘れられません。その一方で、シムリアップやプノンペンなどの大きな町では、たくさんのストリートチルドレンと出会いました。裸足で困った顔をしながら「1ダラー。」と近寄ってくる子どもたちを見て、何度も胸が痛みました。

トゥールスレン博物館やキリングフィールドではカンボジアの悲しい過去を知り、また、地雷原で今も残る地雷の現実を知りました。拷問に使われた部屋を見ても、頭蓋骨を見ても、地雷をみても、受け入れることが難しく、でも本当にその場所や物で人が殺されたり、傷つけられたりしたのだと考えたら、言葉がでてきませんでした。

今回のツアーでは、カンボジアの子どもたちや村人の人懐こくて優しい人柄と、素直で純粋な笑顔に癒され、強くたくましく、支え合い助け合いながら生きる姿に、たくさんのパワーをもらいました。この人たちのために何かしてあげたい！という気持ちでいっぱいになりましたが、その前に、日本についてももっと知らなければならぬと感じました。力をつけて、またカンボジアに戻ってきたいです。

このツアーを通しての素敵な出会い、ここには書ききれないくらいの最高の思い出、恵まれた環境、準備やサポートをして下さったスタッフの方々や島村さん、たくさんの笑いをくれたポーキー、そしてこのツアーに参加させてくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。

嶋川 真希子 (山梨県立大学1年)

地雷で足を亡くした人を目の前で見たときは、何とも言えない気持ちになって、彼やストリートチルドレンたちはお金を求めて私たちに近寄ってきたけど、何もあげられず対応に困ることが何度かありました。私はあのときどうすればよかったのだろうと今でも考えます。

地雷の撤去現場の命懸けで撤去している人を目の当たりにして、そう簡単に足を踏み入れていい場所ではないと感じました。日建が開発した地雷除去機が現場で役立っているのを見て、一刻も早く安全に全て取り除かれて、地雷が埋められることがないようにと思いました。たった200円で誰かの日常、人生を奪ってしまうなんてことはあってはならないと強く思いました。

収容所やキリングフィールドに行ったとき、苦しんでいる人の声が聞こえてきそうで、見れば見るほど自分と同じ人間が引き起こしたのだということが信じられませんでした。家族でさえも信じられなくて自分が生きるために必死だった時代があった30年前にそこで起こっていたことだと、一日目に見たプノンペン街の様子からは想像できませんでした。

一日目は、カンボジアは温かい人が多く活気がある国だと感じたけど、その表面の印象とのギャップが大きかったです。街であった笑顔の印象的な果物屋のおばさんは、笑顔で自分の過去を隠しているのか、もしくは彼女は今幸せだから笑えるのか、どちらなのか気になります。家族と幸せに過ごしていたらいいなと思います。ポルポト政権が引き起こしたことと同じように、日本も一時は加害者だったという歴史をもっているのです。カンボジアの歴史を知るとともにもっと自国の歴史をきちんと知っておくべきだと感じました。そして、世界中で二度と同じ歴史を繰り返さないためにも、歴史を伝えることは欠かせないと思えました。

このツアーでは現地の子どもと触れ合う機会が多くあり、とても癒されました。みんな素直で好奇心旺盛で、学校に通えること、学べることに感謝しているように感じました。みんなが学びたいことを学び、自分の夢に向かって強く生きていってほしいと強く思いました。日本のことを知ってもらうために何かすればよかったなと思えました。また会いに行きたいです。



私は今回のツアーでカンボジアの「現在」と「過去」を見ることができました。また、自分は何も知らないし、何もできないことを実感しました。何か助けになりたいと思っても、無力なのだと痛感することが多かったです。世界には美しいものも醜いものもどちらもあるのだと初めて自分の目で確かめられたので、もっと知らないものを知りたい、見たことない光景を見たいと自分の人生で次につながるものを得られたツアーになりました。

「カンボジアスタディツアーに参加して」

鈴木 すみ子 (主婦)

昨年冬、山梨国際交流協会の「カンボジアスタディツアー」に参加しました。

首都であるプノンペンには、車とオートバイで混雑し、市内には立派な寺院や学校もあり、マーケットには、商品が豊富に並び、活気に満ち溢れていた。首都プノンペンからバタンバン州へ進むにつれ、見える景色は、質素な家と土ぼこりの道、電気も水道もありません。飲み水は雨が降った時に溜めておき使うとのことでした。首都と地方では、大きな格差があります。

私たちは農業収穫祭に参加し、稲刈りから収穫までの工程に参加しました。また、野菜、果物の品評会が行なわれました。野菜も果物も豊富、米も収穫できています。支援が行われている地区は豊かになりつつあります。村人たちは笑顔が溢れていました。支援の届かない村の状況を見たいと思えました。

いくつかの学校も訪問し勉強している姿を見ましたが、手元にはノートもエンピツもありません。でも学校に来ることも出来ない子どもたちがいることを知り、まだまだ支援を必要としています。

バタンバン市内にある孤児院を訪問し、交流しました。この孤児院は、内戦による貧困からおきる、親の養育放棄、家庭内暴力、さまざまな理由で、この孤児院ノリア寺に預けられています。ここは住職と日本人女性で運営されています。子どもたちの養育と教育をレストラン経営で支援し、子どもたちの母でもあります。また学校を出た子どもたちは自動車工場、携帯販売会社などに就職、自分のレストランにも雇用しているそうです。貧困の子どもたちの未来はどうなるのでしょうか。今回カンボジアを訪れ、首都と地方には大きな格差があるが、子ども、若者が多く明るい未来が来ると感じました。



「カンボジアスタディーツアーで見た支援活動」

高石 優子 (主婦)



「国際協力」と言っても形は様々です。今回のカンボジアツアーでは、いろんな支援の現場を見ました。

一日目、プノンペンでは、NPO 法人「豊かな大地」の現地スタッフ、モンソンバーさんから詳しい活動内容の説明を受けました。「豊かな大地」は地雷処理後の土地（主にバタンバン州）を開発しています。小学校や道

路、ため池の建設など行い、また農村の人たちと共に働きながら、稲作やキノコ栽培などの指導もしているそうです。

二日目は、JICA 事務所を訪問しました。JICA は ODA（政府開発援助）で、日本政府による国際協力の機関です。事務所の方から、カンボジア事情をはじめ JICA の具体的な支援の内容を聞きました。また山梨から「和食」の調理技術指導で行っている古澤さんのお話も聞くことができました。派遣先である、国立職業訓練校 NPIC 大学の概要、また仕事の内容についてもふれ、調理指導の他、キッチンマネージメント、衛生管理の指導もしているそうです。「和食」という日本の伝統文化が国際協力の一翼を担っていることに新鮮さを感じました。同日プノンペンから北西へバスで約 6 時間走り、バタンバン州に移動しました。

三日目、クロッコロー村へ行き、雨宮清社長の日建と CMAC（カンボジア地雷対策センター）で建てた、CMAC-AMEMIYA 小学校の引き渡し式に参加しました。カンボジア式のセレモニーで、来賓

席に座り、貴重な体験をしました。日建は地雷撤去を行っている山梨の企業です。カンボジアをはじめ、世界の多くの地域で、日建の作った機械が地雷除去の現場において活躍しています。式が終わった後、学校に来ていた子どもたちとも交流ができました。

四日目は、バナナ地区にある、地雷除去後の農村の収穫祭に参加しました。品評会に出されていた作物は日本では見たことがないような珍しいものがたくさんありました。

そのあと「豊かな大地」で建てたプレイピール小学校を訪れ、子どもたちと絵を描いたり、折紙などして交流しました。それから HOC 養護施設を訪問しました。日本からそれぞれ参加者が持っていった折紙や紙風船、飛行機や兜など作って、子どもたちと交流し、別れが惜しいくらい一緒に遊びました。HOC（Hope of Children）は NGO で、代表は岩田さんという女の方です。4 歳から 13 歳の孤児や家庭の事情で育てられない子どもたちおよそ 30 人が暮らしています。家庭の事情で入った子どもたちの出入りは多いそうです。13 歳までとはなっていますが、希望すれば、長くも居られるそうです。HOC では市内にカフェも運営していて、そこでは大きくなった子どもたちが手伝えるようになっています。この後夕食をそのカフェでいただきました。お洒落で素敵なお店でした。

五日目、バタンバンの最終日にはプレイトム村の地雷除去の現場を見に行きました。埋設された対人地雷を見たり、地雷除去機の操作を見学しました。そして対戦車地雷の爆破を体験しました。

今回のスタディーツアーを通じて、さまざまな支援の形があることを知りました。コーディネーターとして参加した岩崎さんは、いろいろな場面で音楽と歌で子どもたちの心をつかんでいました。このような活動もひとりではできない支援なのではないでしょうか。大切なはその国や人々を知ることから始まると思います。

そして共に豊かになることを目指していくものだと思います。

「2つの宿題を抱えて」

高山 時政 (教職員)

1 つ目の宿題は、「繋げる」です。前回のスタディーツアーは、初狩小学校の代表でなく、異動先の禾生第二小学校からの参加でした。帰国後、禾生第二小学校で報告会を行い、子どもたちにカンボジアという国や国際貢献、ボランティアということに関心を持ってもらったことにはそれなりに意義を感じます。しかし、私とカンボジアを繋げた初狩小学校ではなかったことに後悔が残りました。以前、初狩小学校で私と一緒にカンボジアの 3 人を迎え、子どもたちと交流をした福嶋先生が昨年度初狩小学校の校長として戻ってきました。子どもたちの世代は違いますが、今も「豊かな大地」様にアルミ缶の収益金を寄付し、カンボジアと繋がっている初狩小学校。今回、福嶋校長先生にスタディーツアーの参加を説得し、初狩小学校の校長として実際に現地を訪れ、肌で感じカンボジアの子どもたちと交流し、校長先生が自らの体験を初狩小学校の子どもたちと教職員へ伝えることができることに言葉で表せないうれしさを感じています。私の懸案だった 1 つの宿題はこれで解決しました。

2 つ目の宿題は、「自分の使命」って何だろうと自問自答しまう「心の在り方？」です。「子どもたちの幸せのために」「子どもたちが自立できるように」どんなことができるだろうかを考えた教員時代。前回のカンボジアスタディーツアーでも、学校訪問で子どもたちと絵を描いたり、折り紙を折ったり、サッカーボールを蹴りっこしたりと活動しました。確かに子どもたちは笑顔で応えてくれたり、喜んでくれたりしました。しかし、交流が終わり学校を後にする時、校庭には、先ほどの折り紙が散らかり、風が吹けば飛んでいる状態でした。この活動を通して子どもたちは何を学んだらうか。どんな意義を感じたのだろうか。「自分の使命」とは？スタディーツアーという目的でカンボジアに日本から多くの人が押し寄せ、台風のように通り過ぎていく中で、私たちの自己満足で終わらせてはいけないことを強く感じながら、模索を続け、冷めた目で見てしまう自分がいることも確かです。日本の学校でもそうですが、学校行事等があるときは、事前指導、本番、事後指導を通して、教育的意義、目的を子どもたちに理解させていき

ますが、カンボジアの学校や施設でも私たちを受け入れるための準備や苦勞は計り知れないものがあるかと思えます。しかし、笑顔で迎えた人たちに私たちの気持ちがどこまで通じているか不安になることがあります。

豊かな大地のモン・ソンバーさんには、カンボジアのプノンペン空港でのお迎えや訪問する場所の先々の段取り、自家用車での先導を行い、私たちが安全に活動できるように配慮していただきました。CMAC のチャン・ソンバーさんも、AMEMIYA 学校の開所式で私と顔を合わせると満面の笑顔と大きな体を寄せてきて力強いハグで大歓迎をしてくれました。全身で喜びを表す彼の姿には人を温かくする心を感じます。新しい学校で学ぶ子どもたちとじっくりと語り合いたかったのですが、言葉の壁がそれを許さず、歯がゆい思いをしなければなりません。笑顔の裏の本当の彼らの姿に答えは見つかるのかわかりませんが。

カンボジアでは、政治、経済、教育、生活インフラ、地雷除去など国をあげての施策から、貧困、薬物、売春、エイズなど国民の生活を脅かす多くの課題を抱えています。それらの課題を解決するために、様々な分野でカンボジアの人々のために多くの日本人が働いています。その中で私ができることは何だろうと考えたとき、ピースインツアーの大塚さんは、「今、一生懸命頑張っている人を応援している。その孤児院がダメになると子どもたちが生きていけない。だから、応援したい」と話されていたことが、強く印象に残りました。ここに 2 つ目の宿題のヒントがあるのかなと感じました。

プノンペンからバタンバンに移動中、バスのトラブルのため、バスが止まりました。私たちは目の前の民家にお邪魔しましたが、軒先を借りた私たちに住民は嫌な顔をせず、庭先にあるヤシの木に登り、ヤシの実を取り、私たちに飲ませてくれました。外国人だと知らず飲み水だと下痢を起こすので、ヤシの実で歓迎してくれました。

「温もりに 触れる度（旅）に 味の素（カンボジア） 意義を感じる 旅（度）に重なり」

「カンボジア・スタディ・ツアーに参加して」

寺内 三枝子(主婦)

「本当の幸せはなんだろう。」カンボジアに行った時から、そう考え続けていました。

豊かな自然と田園風景をイメージして訪れたその地は今なお内戦の傷跡深く、日本の終戦直後を思わせるような経済、社会情勢の中を生きるのに精一杯な人々が生活している所でした。自分の今の物にあふれた生活を思い、足りない物が沢山ある人々に正直、とまどいも覚えました。でもそんな思いを打ち消してくれた出会いがありました。児童養護施設を訪問した時に、見ず知らずの私に、無邪気な笑顔いっぱい駆けよる小さな姿がありました。着ている服や様子から豊かな生活とは思えないその子の笑顔はキラキラ輝き魅力に満ちあふれていました。その可愛らしさ、膝に乗せた時の身体のぬくもりを感じた時に、本当に愛しいもの、守りたいもの、心が洗われるような、いやされるような、その後もこの旅の間中、何回となく感じる事ができました。日々の生活で一様の中で、遠方から来た親しい人をもてなすかのように庭先のヤシの実を味あわせてくれた人、学校で子どもたちの心からの優しい笑顔、握手した手のぬくもり、決して豊かな経済状況ではないカンボジアの人たちの、心の豊かさを教えてもらったように思います。食事と一緒に豪華ではないが優しい味わいで忘れられ



ない思い出の一つです。

復興にはまだまだほど遠く数々の支援を必要としているカンボジアの人たちの、心の豊かさを二度と失うことのないように、負の歴史も受け止めながら、一緒に手をたずさえて、進んでいけるような協力を、今後も出来る範囲やっていくことが、ささやかながら私たちに出来ることの様に思われます。

いつの日か、真に豊かな平和な日々を、普通に過ごせる日が来ることを心より祈っています。

「カンボジア・スタディ・ツアーを終えて」

羽中田 佳(蕪崎高等学校2年)

今回、私は初めてこのスタディーツアーに参加しました。そして初めて海外へ行きました。

カンボジアへ行く前は、ただ貧富の差が激しく違う国であること。そして地雷があること。私はそのことを知っているくらいでほとんどカンボジアについて知らず、考えた事もありませんでした。

しかし、実際に行ってみて思いました。「私には何ができて何をしてあげられるだろうか。」最初私がカンボジアへ行き思ったことは日本とは全く違うということでした。街灯のある道。信号のある道路。日本のどれも私にとってあたりまえなものでした。それがほとんど無い。それだけでも衝撃的なことなのに、それ以外にも様々な理由で小学校、中学校、高校へいけない子どもが多くいること、地雷や不発弾などの戦争の遺物が今だ多く残っているということ、そしてカンボジアの歴史を知り、多くのことに驚きました。

私の中でいちばん印象に残ったことは、地雷原での地雷処理をいくらか処理したとしても、元々地雷や不発弾が埋まっていたという事実が私を安心させませんでした。このような危険な場所で暮らして行かなければならない人々がいるという現実には悲しくなりました。そして、ここで暮らす子どものなかに地雷や不発弾によって生涯を不自由に過ごす人を作るのであれば、一刻も早くすべての地雷、そして不発弾を処理し、現地の



人々が安心して生活できる土地を広げてほしいと思いました。そのためには、やはりカンボジアの技術の発展が必要だと私は思います。そのためカンボジアへの援助は物を提供するだけでなく、同時に技術を伝えなければならないと思いました。何故かという仮に物だけを提供したとしても扱えなければそれはただの物になってしまい、使えたとしても壊れて修理ができなければただのゴミになってしまいます。

私に何ができるのか、まだはっきりしませんが、私が伝えられる技術があるのだったらそれを伝えて発展の手伝いが出来たら良いと思いました。

「カンボジア・スタディ・ツアーを終えて」

羽中田 寛(菰崎西中学校1年)



僕は楽しい気分ですツアーに出かけました。飛行機の窓から日本の町がだんだん小さくなりワクワクしました。

プノンペンでは空気が暖かく水がぬるい。水は飲めず水を買う。クリスマスツリーには雪のモニュメントは無い。バイクは荷物をたくさん積んで走っている。バイクに5人乗っている。信号なんてあったっけ？日本とはまったく違う町でした。

内戦の歴史を学んで「かわいそうだな。」と思いました。僕は戦争を知りません。毎日の悩みも大きなものはありません。もしも僕がカンボジアの人だったら地球くらい大きな悩みがあったらう。

地雷除去現場での体験では、地雷除去の防護服を着て地雷原を歩きました。重くて、暑くて、気持ち悪くなってしまった。バタンバンでは毎日何時間も重く暑い防護服を着て地雷を探すがいます。地雷を踏んで死んでしまうかもしれない人のために、本当の平和のために働く人が暑い国カンボジアにいてすごいなと思いました。

地雷を安全に早く探し出し除去する機械を作る人が日本の僕の家の近くの南アルプスの会社にいます。雨宮社長はカンボジアの悲しむ人に出会って地雷除去機を開発しました。近くにそんな凄い人がいることは僕の大発見でした。

僕はこのツアーでたくさんの小学校と児童養護施設を訪れし同年代の人やちいさな子どもたちと出会い折り紙を折ってあげました。

手裏剣を折るのが得意な僕は数えきれないほど折りました。子どもたちに手渡すと取り合いになってもらってくれました。雨宮社長みたいに立派なことは出来ないけれど、僕の折った折り紙で嬉しそうに笑ってくれたことは小さいけれど支援が出来たようで嬉しかったです。

僕は中学1年生で中学校では支援学級にいます。僕も支援を受けて勉強をしていますが、折り紙を折ったように僕ももっと勉強をして自分に出来る支援をしたいと思いました。

「カンボジア・スタディ・ツアーを終えて」

羽中田 桂子 (アーティスト)



2回の日本での研修でカンボジアの歴史、内戦の事、地雷除去活動を学びソンバーさんの自伝の絵本と「19歳の小学生」そして研修からカンボジアの苦難と混乱の歴史、クメール・ルージュによる「地獄の平和」14,000～20,000人の知識人と子どもまでも拷問、処刑した言葉にならないほどの衝撃的な歴史を知り、私は旅の前、冷たいコンクリートの誰も存在しない

建物を題材とした「Hope」という絵を描きました。ツールスレン博物館とキリングフィールドへ訪れて今も残る悲痛な施設と資料に、その絶望感と恐怖はますます現実的となり、何日間も夢にうなされました。

プノンペンの町は、バイクと車がたくさん行き来し、クリスマスが近いため大きなツリーのイルミネーションもあちらこちらに見ることができました。日本の企業もたくさん見かけることができ、再生の勢いを感じました。

JICAカンボジア事務所では日本の援助が今のカンボジアの大きな力になってること。知識や技術を援助し人を育てることで更にその人が世界で活躍できるようにと地球レベルでの支

援に関心いたしました。

CMAC見学と、地雷除去の現状を知り、カンボジアの1人の声から地雷除去機を開発し、農地を広げ、小学校を作る雨宮社長の素晴らしさに感動しました。

バタンバンでは広大な自然の中、地雷除去の済んだ土地ではたくさんの家族が作物を作り家畜とともに穏やかに暮らしていました。農作物の生産は120%。まだまだ教育、環境は発展途上ですが、豊かな自然と豊かな笑顔の人々からは人間の原点になる「命が住める場所」を見ることができました。

CMAC-AMEMIYA小学校ではチョークを使って子どもたちと交流しました。

HOC児童養護施設でもチョークと日本で制作した厚紙の黒板で子どもたちとチョークアートを楽しみました。プレイビール小学校ではコーディネーターの岩崎さんに絵を描いてもらい夢を語ってもらうことで、未来の自分を想像する事を伝える試みができました。

「平和になると動物がたくさんやってきます。」案内をしてくださったポーキーさんの言葉が頭から離れません。貧困の国のイメージがあったカンボジアの人々は私にまっすぐなまなざしと笑顔をくれました。確かに電気や水道、医療や教育もまだまだ足りないばかりですが、自殺の多い日本、子どもたちが自由に遊べない社会環境、高齢化社会、物が溢れ依存症、鬱病の多い日本、そして動物を見かけなくなった日本。「命の住める場所」その問いかけの余韻がする旅でした。

共に旅した素晴らしい人との出会いに感謝しつつ「Hope」から始まった旅は、「Door」の制作とそれを伝えることで終わります。

● はじめに

大月市立初狩小学校は10年ほど前から児童会によるアルミ缶回収の収益金をカンボジアの復興支援に送っています。

また、5年前から現地の小学校と「絵画や写真の交換」を通して児童の交流を続けてきました。校長としてカンボジアの子どもや教育の視察をすべく、「国際交流協会設立25周年記念事業 カンボジア・スタディ・ツアー」の一員として現地に赴くことになりました。

● 研修を終えて

基礎知識は持ち合わせているつもりでしたが、カンボジア首都プノンペンと農村との格差には驚くばかりでした。近代的な高層ビル建設ラッシュに沸く首都の一方で、国民の7割は農村にあって前近代的な暮らしをしていました。学校は日本と同じ6・3・3制。低学年は午前、高学年は午後のみで二部制授業。子どもたちは一日の大半を農作業や家の手伝いに費やします。就学率は定かではありません。訪問先の小学校の一つには以前に送った初狩小学校からの絵画が飾られ、親しみを感じました。子どもの服装は白いシャツに紺色のズボンやスカート、ビーチサンダルが裸足です。どの顔も好奇心に満ち健康的な笑顔と俊敏な行動が印象的でした。実によく働き、地雷が大量にまかれていたカンボジアの大地にあって、懸命に暮らしを支えながら学ぶ子どもたちの姿に胸が詰まりました。また、州知事・軍隊・警察・住民が総出で祝った学校の開校式典では、かつての日本における村々の学校がそうであったように「まさに学校は地域の灯台であり文化の発信地である」との実感を持ちました。授業を観察する中で校舎や教科書やノートといった支援も重要ですが、授業を受け持つ教師の力量にこそ克服すべき深刻な問題



があるとの印象を持ちました。内戦によって知識層やその子どもが肅清された傷跡は未だ癒えていないのです。「国民平均年齢24歳」は、教師層に教育を受けた者がいないということをも意味します。今後の国際貢献は、ソフト面での支援が重要になってくることは確実でしょう。

夕暮れのシェムリアップ空港から帰国の途につきました。眼下の大地の明かりはポツリ、ポツリとかなりの間隔で点を打つ。滑走路や幹線道路に沿っての明かりがかりうじて線を描いていました。やがて、日本・・・明かりは面となってまばゆく広がっていく。ともにアジアに生きる民として、日本の子どもたちから、国際貢献の一翼を担う人材が輩出することを願わずにはいられません。カンボジアそして日本の子どもたちの未来が、どうか平和で幸せでありますようにという思いをいっそう強くした研修でした。

「わたしが見て感じたカンボジア」

正木 香帆 (山梨県立大学1年)

「私は今回のスタディツアーに参加して、カンボジアの印象が180度変わりました。実際に行って、見て、感じて、驚いたことが多くあります。

プノンペンの空港をバスで出発した瞬間から、自分が思っていたカンボジアと違うかもしれないことに気が付き始めました。それは、道走る車やバイク、トゥクトゥクの多さ、街中に飾られているイルミネーション等の派手な電飾、賑わう市場など、見えてくる景色がすべて活気にあふれていたからです。私は一瞬、この国に本当に地雷が埋まっているのか、そしてここが発展途上国だと言えるのかと疑ってしまうほどでした。正直、私が想像していたカンボジアはもっと静かな田舎のようなところでした。

私がこのスタディツアーを通して一番心に残っているのはKilling Fieldsです。カンボジアの歴史を詳しく知らなかった私にとって衝撃的な場所でした。私が生まれる少し前の年まで大量虐殺が行われていた所だと知り、心が痛みました。その事実が目で見えてわかるのもさらに胸を締め付けました。もちろんKilling Fieldsの場所自体もそうなのですが、どこに行っても男性のお年寄りをなかなか見かけないという現状があったことでも現実を見せつけられた気がしました。活気のある国だと思わせた都市はこんなにも悲しい歴史を抱えていたのかと思うと、あまりのギャップに驚きが隠せませんでした。これは、きっと現地に行かなければ感じられないプノンペンの雰囲気だと思います。とても刺激的な場所でした。

また、バタンパンの小学校や孤児院の子どもたちと交流をした時間は、私の宝物になりました。

一緒に日本のおもちゃで遊んでいるときの楽しそうな姿や、笑顔で手を振ってくれる姿、みんなでアラビヤを歌う姿などを見ることができ、私自身も嬉しくて楽しくて仕方ありませんでした。彼らの笑顔を守るために、自分がこれからどんなことをしていくべきなのか、何ができるのか、考えていきたいと改めて思える時間となりました。



もしもスタディツアーに参加していなかったら、私はカンボジアに対して「地雷が埋まっている途上国」というイメージしか持てなかったと思います。歴史のことも、子どもたちの笑顔のことも、発展した街があることも、CMACの活動の様子も、何も知ることができなかつたはずですが。だからこそ実際に現地に赴き、見て感じることは、本当の世界を知ることが出来る一番の手段であり、重要なことであると私は思います。カンボジア・スタディ・ツアーに参加させてくださりありがとうございました。

「カンボジア スタディツアー感想」

諸井 星哉 (駿台甲府高等学校 2年)



私は、2015年12月のクリスマス前後にカンボジアに行ってきました。国際協力の現場を見学し、その現場を知るといふものです。

まず飛行機から降りて感じたことは、水と藁が混じって、腐葉土になり始めた時の様なおいさです。それは、常総市に鬼怒川決壊の時のボランティアに行った時に町中で感じたにおいを薄くしたようなにおいでした。

空港から出発して移動している、3人以上でバイクに乗って大きい車道を走っていたりする人や、信じられない程の荷物を積んだバイクを運転する人、バイクで逆走したり歩

道を走っている人を良く見かけました。車よりもバイクの方を良く見かけました。たぶん交通ルールが発達していないところでは、車よりもバイクの方が小回りがきいて便利なのだろうな、と思いました。初めのうちは驚いていましたが、途中からはあまり気にならなくなりました。

長く続いた内戦の歴史や悲劇について知ってショックを受けました。たくさんの拷問の写真や記録、安置された犠牲者の頭蓋骨を見ていると、どんな理由があればあんなに心が痛む事ができるのか、想像もつきません。しかし、そんな過去があるにもかかわらず、笑顔がまぶしい現地の人たちにはとても心が温かくなりました。

周りには何も無いような所にある家や学校にも行きました。小さな子どもがとても可愛らしく、つい写真を撮ってしまいました。また、小学生たちはみんな明るく、カメラや遊びに大きな反応を返してくれて、つい写真を撮りすぎてカメラのバッテリーを大きく減らしてしまっていて慌てたりもしました。

最終日に見学したアンコールワットとベンメリア遺跡はとても素晴らしい経験でした。どちらもあらゆる所に神様が描かれ、私の第一印象は建物を使って描かれた曼荼羅みたい、でした。また、アンコールワットで見た朝日はとても壮大なものに感じられ、最終日だというのに随分日本から離れた所に来てしまったな、と今更ながらに、感じさせられました。

また同じ様な機会があったら、また参加したいです。

「カンボジア スタディツアーを終えて」

若狭 政雄



一日目のプノンペン視察で感じた事は、街中には若者ばかりが目についた。それもそのはずで、20年前の内戦により200万人とも300万人ともいわれる人達が犠牲になったからであ

ろうと思います。平均年齢も日本人は46歳に対してカンボジア人は24歳であるので当然だとは思いますが、日本の高齢化社会を考えると羨ましい限りです。

ただ、高級乗用車がプノンペン市内を走っているのが目立ちましたが、地方の田舎に行くと上下水道の未整備どころかカンボジアの電気供給率は日本の100%に対して僅か29%です。カンボジアへは、日本のODAはガバナンスの強化を支援しているとJICAでの講義で説明をうけましたが、物資の支援以上にこれからのカンボジアが必要とされているものだと思います。

具体的には、法整備・行政機能向上・公共財政管理等ですが、国の財政は税収で賄っていますが、カンボジアに於いては、まずは、取れるところから取っているのが現状だそうです。街中は活気があるので公平な税収を確保して、せめて、暮らしの基盤ですから電気供給率100%の実現を期待しています。

カンボジアは、農業国で稲作が主産業です。田圃は日本とは比べものにならない位の地平線が見える広い広い土地です。それも真っ平らなために川も無い地形であるため、農業用水路を作ることが出来ず、天からの雨水が頼りの稲作栽培を行っているとの事です。本来稲作は、亜熱帯の地域が適しているため、二毛作栽培が可能な地域ですが雨季(5月～10月)の時期だけの稲作栽培となっているが、何せ天からの恵みの雨次第の栽培方法であるため、今シーズンの収穫量は、降雨量が少なかったためやや不作であると聞きました。

広大な田園地帯にも、機械化が少しずつ進んでいるためか、日本では見られないほどの超大型のコンバインを何度か車窓から見ることが出来ました。ただ、殆どの農家では、家族(子どもも大事な労働力)や親戚が集まりすべてを手作業で行います。

今回のスタディツアーで一番感じたのは、私たちが決して豊かではない暮らしを送っていると思われる、カンボジアの人たちの笑顔が脳裏に今も焼き付いています。それは何なのか自問自答をしています。私なりに思うには、日本の国は、戦後急速に高度成長が進み物心両面で豊かにはなったが、その一方で便利さゆえに時間に追われ「ストレス」が知らず知らず溜まってくるとは無いかなと思います。グローバルな生き方もよろしいが、衣食住が揃っていれば、生きていけるであろうし、カンボジアの田舎に暮らす人々を思い出すと、忙しく生きようとせず、羨ましくさえ感じた旅でした。

いつの日か、真に豊かな平和な日々を、普通に過ごせる日が来る事を心より祈っています。

「カンボジア」

岩崎けんいち（シンガーソングライター／コーディネーター）

音楽仲間と2003年にカンボジア プノンベン郊外に学校を建てたことから僕のカンボジアへの旅は始まりました。1回行けばいいかなと思い、2004年に初めて訪れてから気がつけば今回で15回目になっていました。今回のように声をかけていただけて行けることも多くなって来ました。続けることの大切さを感じています。

英語もカンボジア語も話せない僕がコミュニケーションを取っていたのは歌と笑顔でした。カンボジアで覚えたカンボジア民謡アラピヤは世界をグッと広げてくれています。どこで歌ってもみんな笑顔になり歌声が響き渡ります。カンボジア語で歌ってくれてることに驚き喜んでくれていて行く先々で僕の顔を見ると「アラピヤ、アラピヤ」と声をかけてくれます。

今回のスタディツアーでバットマンの地雷原を訪れた時のこと、地雷原の地雷を除去し、学校を作り、畑を作り、運動場となったCMAC-AMEMIYA小学校のオープニングセレモニーに参加した時に、知事さんや地雷除去作業をしている人や村人の前で歌うチャンスをいただきアラピヤを歌いました。子どもたちと歌いました。村人も偉い人も地雷除去作業員の皆さんも1つになって歌いました。かつて地雷の危険にあった大地の上で、楽器を鳴らして歌声が爆発していたのです。爆発していたのは歌声でした。

これらの道を切り開いて来たのは山梨の日建の雨宮清さんが地雷除去マシンを開発して地雷の無い世界を目指しているからです。

今回、雨宮清さんがテープカットのセレモニーに日本からやって来ていました。その1番真ん中に雨宮さんがいたのを見た時、熱くこみ上げるものがありました。同じ山梨県人だということや、その道のりや諦めない気持ちにグッと来ました。ニュースにはならないことでも信念を貫き、大切なこととして一つ一つの夢を叶えて行く勇気をもらいました。僕もそうありたいと思いました。

今回コーディネーターとして参加させていただき、大好きなカ



ンボジアを多くの人と歩けたことは、嬉しさを通り越して喜びです。発展途上国カンボジアが抱える問題はまだまだたくさんありますが、「続けること」これしか進む道はないなぁと改めて思いました。そして僕も音楽で何が出来るのかを考えて行こうと思いました。

カンボジアのツアーガイド「ポーキー」からも多くを学びました。どんな状況でもユーモアを忘れない気持ちは世界を明るくしていくんだなぁと感じました。

皆さんと同じ景色をみて、感じ、ふれあい、語り合えたことは何ものにも変えられない貴重な時間、体験になりました。地雷原で迎えたクリスマスイブは一生忘れないでしょう。

出会いに感謝します。

Mr. アラピヤ 又はアラピヤおじさん 岩崎けんいち

「今を生きるカンボジア」

雨宮 由里恵（公益財団法人 山梨県国際交流協会）

2011年にカンボジアを訪れてから4年。カンボジアの「今」を体感するスタディツアーを実施しました。

高級車が走り抜け、きらびやかな首都プノンベンの街とは対照的に、地雷原のあるバットマンの村のほとんどは電気も水道もなく、人々の暮らしも以前と変わらず決して豊かではありませんでした。

レイプル小学校での交流の後、校庭では帰宅を前に、今から配られるランチ用のパンと水を見つめ、そわそわしている子どもたちの姿がありました。現地コーディネーターをしてくれた「豊かな大地」のソーパーさんは元教師、子どもたちを並べさせること30分、なかなかGOサインを出しません。子どもたちがまっすぐ並ぶまで辛抱強く指導し、できるだけ何度も何度もやり直し。空腹と暑さ、子どもたちの負担になるのではという問いかけに、「【並ぶ】ことは学校に来てはじめて学ぶこと。農作業の手伝いなど家庭の事情でなかなか学校に来ることができない子どもたちにきちんと【並ぶ】ということを教えたい。」と。私たちの訪問が学ぶ機会であったこと、子どもたちが唯一パンを食べられる機会でもあったこと、そこにはまだまだ乗り越えなければならない教育と貧困の壁がありました。

地雷原では、厚重的な防護服に身を包んだCMAC職員が手作業で地雷を探し、遠方では地雷処理機が伐採作業をしていました。CMACの効率的な除去技術と実績が認められ、今やコロンビア、ラオス、アンゴラの地で不発弾や地雷処理の技術を伝えていきます。2000年、地雷処理機が初めてカンボジアの地で稼働したとき、CMACの人たちはその性能に半信半疑。開発した雨宮社長は、靴



をぬぎ、裸足で地雷原に入り、身をもってここには地雷がないことを訴えたといいます。生命をかけ地雷処理をしている人たちと本気で向き合う覚悟を経て、今、農作物が育ち、子どもたちが駆け回る学びの場、CMAC-AMEMIYA小学校となりました。

このスタディツアーをとおして、カンボジアの人々の寛容さ、ユーモア、子どもたちのあふれる好奇心に触れ、何ができるのか自問自答しながらも、自然と笑顔でいた私がいました。おもてなしのココナッツジュースは甘く、ゆっくりと心に染み渡っていききました。

注文の多い国際交流協会の提案を快く受け入れ企画してくれた「豊かな大地」の寺平さん、ソーパーさん、どんな時もジョークで和ませてくれたガイドのポーキーさん、本当にありがとうございました。そして、参加者の皆さん一人ひとりの熱い想いが色彩をおびたディープなスタディツアーへと導いてくれました。

心より感謝をこめて。

「事前研修」



● 第一回事前研修／11月14日（土）

- * (株) 日建見学及び地雷除去活動等説明 「豊かな大地」理事 寺平 誠氏
- * 「カンボジアでの音楽交流」 岩崎けんいち氏
- * グループワーク

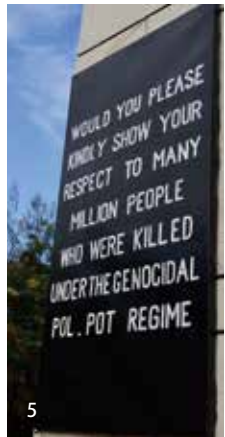
● 第二回事前研修／12月5日（土）

- * 「カンボジア事情」シニア海外ボランティア 折居 和夫氏
- * グループワーク



- 事後研修／平成 28 年 1 月 30 日（土）
- ＊ 帰国報告会
グループワーク発表
- ＊ 「カンボジア・スタディ・ツアー」写真展示

プノンペン（トゥールスレン博物館、王宮、キリングフィールド等）



1～5 キリング・フィールドにて

6 王宮観光

7～9 トゥールスレン博物館にて

生存者の一人から話を聞く参加者たち

JICA カンボジア事務所、カンボジア地雷対策センター (CMAC)



1〜3 JICA カンボジア事務所にて 山梨県出身のシニアボランティア 古澤さん（日本料理）から活動紹介 4〜6 CMAC（カンボジア地雷対策センター）本社にて 7 立ち寄った民家でココナッツジュースのおもてなし 8 似顔絵を描く羽中田さん 9 記念撮影

CMAC-AMEMIYA 小学校オープニングセレモニー、HOC 児童養護施設訪問



1 CMAC-AMEMIYA 小学校を寄贈した(株)日建 雨宮社長 2 CMAC-AMEMIYA 小学校 3 セレモニーに参加した女子たち
4 羽中田さんの描いたカンボジアの鳥を模写する子どもたち 5 カンボジア舞踊 アプサラダンス 6 バッタバン州知事や CMAC 長官、
地域の人たちとアラビア大合唱 7~10 チョークアートやけん玉を楽しむ HOC 児童養護施設の子もたち 11 HOC 児童養護施設代表 岩田亮子さんと一緒に

農業収穫祭（稲刈り体験、農産物品評会）、プレイピール小学校訪問



1 2 稲刈り体験 3 4 餅作り 5 農産物品評会入賞者 6 岩崎さんの楽器ではしゃぐ子どもたち 7 農産物品評会
8 チョークアートに挑戦 9 色紙で花作り 10 11 新聞紙で作るカブトは大人気 12 クメール語でキラキラ星を歌うD班

地雷撤去現場視察



1 2 CMAC 職員より地雷除去活動について説明 3 地雷サイン 4 対戦車地雷のボタンを押す海老沢くん 5 カンボジアから地雷がひとつ消えた瞬間 6 地雷除去の前にまず伐採、活躍する地雷処理機 7 8 ズシンと重い防護服を着用して地雷原へ

アンコールワット遺跡



1 3 5 壮大なアンコール遺跡群 2 クリスマスの日、アンコールワットからのぼる朝日は格別 4 アンコール ジャンプ!
6 記念撮影

公益財団法人 **山梨県国際交流協会**



〒400-0035 山梨県甲府市飯田2丁目2-3 山梨県立国際交流センター内 Tel.055-228-5419 Fax.055-228-5473 www.yia.or.jp webmaster@yia.or.jp

協力 認定特定非営利活動法人「豊かな大地」 株式会社日建 JICA 横浜

この事業は、公益財団法人山梨鈴木助成事業財団の助成を受けて実施しました。